

「科学的事実の社会的構成」を「現金化」する

出口康夫（京都大学）

科学哲学は、社会構成（築）主義から何を学ぶことができるのか。幾度となく問われてきたこの問題を、構成主義の「現在」をも視野に入れ、私自身の科学哲学的関心に引き付けて、以下で改めて問うてみたい。即ち、私は今、社会構成主義者たちから何を学ぶことができるのか。私にとって、彼ら彼女らの主張のどこが「輝いて」見えるのか。

一口に社会構成主義と言っても、その主張はあまりに多様である。そこで本発表では、H.コリンズや、アクター・ネットワーク理論（ANT）を奉ずる論者（B.ラトゥール・M.カロン・J. ローら）が主張してきた「科学的事実の社会的構成」というテーゼ（以下、「事実の構成」テーゼ）に焦点を絞る。（このテーゼは、ローの近年の著作で展開されている、“*after actor network theory*”（Law 1999）においても同様に見てとれる。）

このテーゼは、一見、極端な反実在論的主張のように響く。即ち、それは、字義通りにとれば、「例えば「成長ホルモン放出因子」（Latour and Woolgar 1986）や「アテローム性動脈硬化症」（Law 2004）といった、科学知の対象である「事実(fact)」が、科学者が営む社会的活動によって（ないしは、人間と非人間の両方をエージェントとして持つアクター・ネットワークの活動によって）生み出される」という事態を意味しているのである。そして、このことはまた、「科学的事実」が、科学者の集合的な営みに先行して、それらから独立して存在しえないことをも含意している（Law 2004, 24-25）。

だが、このような「反実在論的な主張」は、（多くの場合）あくまで「見かけ上のもの」に過ぎない。（「全て」ではないにせよ、「多く」の）「事実の構成」テーゼの実質的なポイントは、「事実」そのものの非独立性・非先行性といった「反実在論的な主張」にあるのではない。これが本発表の一つの主要な論点である。では、そのテーゼの「正体」は何か。私の見るところ、それは、次の二つのテーゼへと「翻訳」ないし「還元」できる、ないしはされるべきなのである。

まず第一のテーゼとは、「科学知の直接の（ないしは第一義的・原初的な）対象は、人工物（the artifact）である」というものである（これを「人工物テーゼ」と呼ぶ）。もちろん、科学は人工物のみならず自然物も対象とする。ただし、自然物は、科学にとって、あくまで間接的な（ないしは二義的・派生的な）対象に過ぎない。これが、この「人工物テーゼ」の含意なのである。（「人工物テーゼ」こそが「事実の構成テーゼ」の実質的内容だとする見解は、例えばシスモンドも採用している（Sismondo 2010）。）

では、「人工物についての知」から「自然物についての知」への「転換」はいかにして起こるのか。後者は前者からいかに導かれるのか。この導出のプロセスは、例えば「アナロジー」を用いる（広い意味での）論理的ないしは科学方法論的な過程ではなく、徹頭徹尾、社会的ないし政治的なプロセスである。人工物としての科学知の対象は社会的なプロセスを経て「自然物化」ないし「自然化」される。このような主張を「（人工物の）社会的な自

然化テーゼ」と呼ぼう。これが上の反実在論的な主張の内実をなす第二のテーゼである。社会的に構成されたと言われる「事実」とは、このように社会的なプロセスによって科学知の対象へと新たに組みこまれた「自然物」に他ならないのである (Latour, 1987)。

このように「事実の構成テーゼ」を、「人工物テーゼ」と「社会的な自然化テーゼ」へと「翻訳」することで、前者が持っていた「反実在論的な見かけ」、即ち「科学的事実そのものの非独立性・非先行性」の主張が姿を消す。「事実の構成テーゼ」は、「原初的には「人工物についての知」でしかなかった科学が、社会的なプロセスによって「自然物についての知」へと拡張される」という主張へと「現金化」されたのである。この「現金化」によって、「科学的事実の社会的構成」は反実在論の「仮面」を脱ぐばかりか、そもそも「対象の存在のあり方」についての主張であることもやめる。それは「脱存在論化」されるのである。

このような「脱存在論化」は幾つかの重要な含意ないし効果を持つ。その一つが、「事実の構築テーゼ」が持つ「意義」の明確化である。「人工物テーゼ」は、コリンズやラトゥールら以外にも、多くの論者が主張している。例えば、「実験室では「自然」は見出され得ない」とする科学人類学者クノール・セティナ (Knorr Cetina 1981,4) のみならず、「近代物理学が扱うほとんどの現象は人工的に製造されたものだ」と語るハッキング (Hacking 1983, 228) や、「他の条件が全て同じならば(ceteris paribus)」という但し書きがつくことで、科学理論の対象は、人為的に制御された現象に限られていると論じたカートライト (Cartwright 1983)ら科学哲学者も同様の主張を行ってきた。だが、これらの科学哲学的主張は、「科学は人工物を超えて、いかに自然物を対象とするに至るのか」についての明確なビジョンを十分には描いてこなかったように思える。一方、「事実の構築と脱構築」を唱えたコリンズ (Collins, 1991, 162) や、科学の対象の「人為性」が「ブラック・ボックス化」される過程を「脱様相化」のプロセスとして描いたラトゥール (Latour 1987, 1988, 2005) らは、この「人工物から自然物へ」という科学的対象の「拡大」のありさまを詳細に説明してきたのである。科学的事実の社会的構成という彼らの主張の最大の意義の一つは、「社会的な自然化テーゼ」として、このプロセスを「社会的・政治的な過程」として具体的に記述し、説明した点にあるのである。(もちろん、ここで言う「自然化」の社会的なプロセスの記述は、彼らの専売特許ではない。例えば、シェイピンやシェッファーの仕事 (Shapin & Shaffer 1985; Shapin 1988)や「外在性」を巡るピンチの議論 (Pinch 1985) も、同じ論点を扱っている。)

一方、本発表が試みる「脱存在論化」は、「事実の構成テーゼ」を奉じる論者たちが抱える問題点をあぶり出す効果も持つ。そのテーゼは、本発表に言わせれば、多くのケースでは、存在論的な実質を欠くという点で「ミスリーディング」であり、またある場合 (Law 2004, 24-25) には、反実在論に明示的にコミットしているという点で「行きすぎ」なのである。

参考文献

- Cartwright, N., 1983, *How the Laws of Physics Lie*, Oxford UP.
- Collins, H., 1991, *Changing Orders*, 2nd ed., Chicago UP.
- Hacking, I., 1983, *Representing and Intervening*, Cambridge UP.
- Knorr Cetina, K., 1981, *The Manufacture of Knowledge*, Pergamon Press.
- Latour, B., 1987, *Science in Action*, Harvard UP.
- 1988, *The Pasteurization of France*, Harvard UP.
 - 2005, *Resembling the Social*, Oxford UP.
- Latour, B. and Woolgar, S., 1986, *Laboratory Life*, 2nd ed., Princeton UP.
- Law, J., 1999, 'After ANT: Complexity, Naming, and Topology' in J. Law and J. Hassard (eds) *Actor Network Theory and After*, Blackwell.
- 2004, *After Method*, Routledge.
- Pinch, T., 1985, 'Towards an Analysis of Scientific Observation: The Externality and Evidential Significance of Observational Reports in Physics', *Social Studies of Science*, 15, 3-36.
- Shapin, 1988, 'The House of Experiment in Seventeenth-Century England', *Isis* 79, 373-404.
- Shapin and Shaffer, 1985, *Leviathan and the Air-Pump*, Princeton UP.
- Sismondo, S., 2010, *An Introduction to Science and Technology Studies*, 2nd ed., Wiley-Blackwell.

※なお各発表者の予稿以外にも、現在、発表者間で、相互コメントが交わされつつあります。相互コメントの電子的送付をご希望される会員は、オーガナイザーの出口までメールでご連絡ください。大会前日（2010年11月26日（金））の段階で添付書類としてお送りいたします。